

体験活動が子どもに与える影響 — 2年間の体験活動事例を通して —

時 代¹⁾ 明石要一²⁾

¹⁾千葉大学・教育学部客員研究員 湖州師範学院・外国語学院 ²⁾千葉大学・教育学部

Effect of Experience Activity to children — Two Case Study of A Experience Activity Model Program —

SHI Dai¹⁾ AKASHI Youichi²⁾

¹⁾Guest Researcher, Faculty of Education, Chiba University,
Japan Department of Foreign Language, Huzhou University, China

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本論文は、子どもに対する体験活動の影響を検討することが目的である。2つの体験プログラムをケースとして、体験活動の事前、事後そして一ヵ月後に、4つのアンケート調査を行った。その結果は、(1)一週間の自然体験・生活体験・集団宿泊体験活動を通して、子どもは「生きる力」という総合的能力が増強し、学級の凝集性が高まり、生徒間あるいは教師と生徒間の連帯感が増え、仲間関係がより開放的に変化している。(2)以上の改善がみられる一方、「非日常」的体験によって、クラスが機能しにくく、秩序に乱れが生じやすい面もある。また、学級・人間関係の変化によって不適応を起こした子どもの様子も読み取れた。いずれの問題提起は、教師はどう配慮すべきかについて、1つの手掛かりになる。(3)量的調査を通じて、子どもの変化は明らかになったが、その変化の理由と影響要因を追究するために、さらなる質的研究が必要であると今後の課題を示した。

キーワード：体験活動 (experience activity) 効果 (effect) 評価 (evaluation)

「学力重視」の流れのなかで、「体験」の重要性が注目されはじめています。

平成19年、中央教育審議会は「次代を担う自立した青少年の育成に向けて(答申)」において、青少年の「基礎的な体力の低下や不足、意欲を行動に移す段階でのつまずき」に対して、「多様な体験活動の機会を提供し、体験活動をすべての青少年の生活に根付かせる」と提言した。さらに、同年度の教育再生会議によって、「様々な体験活動を通じて、子どもたちの社会性、感性を養い、視野を広げる」ために、「学校は子どもたちの成長段階や地域の実情を踏まえ、全ての学校段階において体験・奉仕活動を実施する。小学校で、一週間の集団宿泊体験や自然体験、農林漁業体験活動を実施」と具体的に提言された。

自然体験活動、その歴史は野外教育活動にさかのぼることができる。長期にわたって野外教育活動を実践してきた少年自然の家は、自然体験活動の展開に大いに貢献できる。実際、文部科学省のスポーツ・青少年局青少年課は、平成20年度「青少年体験活動総合プラン」を実施し、小学校自然体験活動プログラム開発事業を独立行政法人国立青少年教育振興機構に委託し、多くの国立青少年の家では、地域特性を生かす自然体験活動プログラム開発を行いながら、活動前後による子どもの変化をはかろうとしている。しかし事業報告を見る限り、子どもの意識の変化についての評価が多く、しかも体験活動の個

人に対する効果が論じられることにとどまっている。

時・明石(2010)は1つの体験プログラムをケーススタディとして、子どもの自己認識、仲間集団、学級の側面より、自然体験活動の効果を捉えようとした。その結果は、(1)約1週間の自然体験、生活体験と集団宿泊体験活動を通して、子どもは「社会心理能力」、「徳育的能力」など含める「生きる力」が向上し、統計的有意が認められた。(2)その場での体験にとどまらず、学級のあり方、例えば学級の凝集性、「チーム」としての学級全員の連帯感が増した。(3)体験活動は生徒の仲間集団にも影響を与え、グループ間のつながりがみえており、分散した集団から変化が生じた。(4)体験活動によって、学級の機能がしにくくなり、それぞれの変化に適応しきれない子どもの様子が察知できたため、教師がそれらに配慮する必要もあると、データに基づき提言した。

以上の結果をさらに検証し、体験活動の有効性を明らかにするため、筆者はひきつづき某国立青少年の家と連携して、プログラムを通じた子どもの変化を捉えようとした。また、体験活動を通じて生じた子どもの変化を把握する上で、教師による子どもへの配慮を中心として探ろうとした。本論文ではこの2年間のケーススタディによって、上記の課題を明らかにしていく。

I モデルプログラムの特徴

モデルプログラムAは九州地域の国立青少年の家と地域のA小学校が連携し、2009年6月29日～7月4日に、

連絡先著者：時 代

1 学年1クラスの学校（小規模校）の5年生（本稿でA学級と称する）、20名の子ども（男の子5名、女の子15名）を対象とした体験活動であり、「〇〇やんちゃ教室」と名付けし、以下プログラムAと称する。図表1はプログラムAの概要である。

モデルプログラムBは前述した青少年の家と地域のB小学校が連携し、2010年7月5日～7月10日に、1学年1クラスの5年生（本稿でB学級と称する）、21名の子ども（男の子10名、女の子11名）を対象とした活動であり、「〇〇大草原と〇〇島での冒険」と名付けし、以下プログラムBと称する。図表2はプログラムBの概要である。

2つの概要から、モデルプログラムの特徴が見られる。

1 5泊6日という長期的宿泊体験活動

3泊4日が一般的で、長くても4泊5日の長期宿泊体験活動の現状の中、体験活動の時間がまるまる2日間長く設定することで、より多くの体験活動を実現する時間を確保する。

2 自然体験と教科学習内容の融合

図表1及び図表2で示したように、教科学習に体験的活動を取り入れる形で、効果的指導を図る。プログラムA、プログラムBともに合計30時間以上の学習時間を設定し、5年生の週授業時間数29時間を確保できるようにする。

3 生活体験の取り組み

2つのプログラムとも、毎日食事づくり、洗濯、掃除の時間も設定する。生活体験の中でもっとも重視したのは食事づくりである。野外調理（野外炊飯）のしかたを学習したあと、グループの話し合いで役割分担を決め、食事をつくり、後始末まで行う。一緒に食事を用意することで、自立する力を養うことだけでなく、協議の決め方、役割分担、計画の実行などの社会的スキルを身につけられるようにする。

図表1 Aプログラムの流れ

時刻	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00		
6/29(月)	〇〇小に集合							移動	昼食	開校式	オリエンテーション (学級活動1h)	夕食作り (ご飯・コーラ煮)				入浴・生活タイム	ふりかえり	就寝準備	就寝
6/30(火)	身じたく・起床	朝食づくり1 (ご飯・みそ汁) (家庭科3h)			ダイナミックススペース (基地作り) (図工2h)			昼食	ダイナミックススペース (基地作り) (図工4h)			つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンプの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝		
7/1(水)	身じたく・起床	朝食づくり2 (ご飯)		ダイナミックススペース (基地作り) (図工3h)			昼食	ダイナミックススペース (基地作り) (図工4h)			つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンプの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝			
7/2(木)	身じたく・起床	朝食・昼食づくり3 (ご飯・カレー)				基地の説明	慰霊祭 (学校行事1h)	昼食	基地の 後片付け	移動	生命のつながり (メダカやヒトの誕生) (理科1h)	移動	生命のつながり (メダカやヒトの誕生) (理科2h)	つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンプの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝
7/3(金)	身じたく・起床	朝食・昼食づくり4 (ご飯・おにぎり)		移動	沢登り (体育3h)		昼食	沢登り (体育3h)		移動・休憩	ダイナミックススペース (基地作り) (図工1h)	つどい・入浴・夕食・洗濯		キャンプファイアー	就寝準備	就寝			
7/4(土)	身じたく・起床	朝食・後片付け		目的を定めた伝え方を考えよう (国語2h)		ふりかえり (学級活動1h)	閉校式	移動	〇〇小で解散										

図表2 Bプログラムの流れ

時刻	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	
7/5(月)	〇〇小出発、交流の家へ移動 (途中昼食)								2校集合	開校式・オリエンテーション (学級活動1h)	移動	生命のつながり (メダカやヒトの誕生) (理科1h)	生命のつながり (メダカやヒトの誕生) (理科2h)	入浴・夕食・洗濯		ふりかえり	就寝準備	就寝(宿泊棟)
7/6(火)	起床・身じたく・クランタイム	朝食	登山 (体育3h) (理科1h) (社会1h)			昼食(弁当)	登山(体育)		移動・休憩	大草原とふれあおう (総合的学習時間2h)		スタンプの練習	入浴・夕食・洗濯		星空観察 (理科1h)	就寝準備	就寝(テント)	
7/7(水)	起床・身じたく・クランタイム	朝食	テント撤去片付け	連絡準備	沢登り (体育3h) (理科2h)		昼食(弁当)	沢登り(体育)		移動・休憩	つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンプの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝(宿泊棟)		
7/8(木)	起床・身じたく	朝食	退所点検	〇〇へ移動 (途中昼食)				連絡準備	恐竜島(化石)探検隊 (総合的な学習時間2h)		野外炊飯		入浴・洗濯	スタンプの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝(交流センター)	
7/9(金)	身じたく・起床	朝食づくり1 (家庭2h) (ご飯・みそ汁)朝食		み買出し入れ	高へ移動	生活をするための準備 (テント設置・煮作り)		昼食	伝統漁に挑戦しよう (社会3h)		野外炊飯		準備	キャンプファイアー	就寝準備	就寝(無人島テント)		
7/10(土)	身じたく・起床	朝食づくり2 (家庭2h) (ご飯・みそ汁)朝食		移動	閉校式	移動 (途中昼食)			〇〇小到着解散									

II 研究方法

冒頭で述べたように、体験プログラムを多角的視点から評価するために、4つの質問紙調査を用意し、プログラムAでは体験活動の開始時(事前調査)と終了時(事後調査)の2回行った。プログラムBにおいては、体験活動の効果がどれほど維持できるかという問題意識によって、測定時期を事前と事後、一ヵ月後の合わせて3回行った。

1 IKR評定アンケート

「IKR評定(簡易版)」は、橘らが開発した「生きる力」を測定するための70項目から絞り込んだ28項目である¹⁾。その内容は、「いやなことは、いやとはっきり言える」といった心理的社会的能力(14項目)、「自分かってな、わがままを言わない」といった徳育的能力(8項目)、「早寝早起きである」といった身体的能力(6項目)の3つの能力で構成されている。

2 学級調査

学級の様子を把握し、生徒指導と学級経営に活用される、廣部²⁾が開発した「学級調査」の20項目である。その中で、「明るく楽しい雰囲気がある」の学級風土を測定する項目、「行事などでは、みんなが一つになって取り組める」のような学級の凝集性を測定する項目、と「いじめや言葉の暴力で悩んでいる人はいない」のような問題行動を測る項目が含まれる。

3 ソシオメトリック・テスト

ソシオメトリック・テストは、アメリカのモレノ(Moreno, J.L.)の理論によって開発された、子どもの遊び集団を捉える代表的手法である。本研究はその修正版、つまり「拒否」をなくし、「いつも一緒に遊んでいる人」の名前を人数限定しないほどの空欄を用意し、自由に挙げてもらう。

4 エゴグラム

エゴグラム(Egogram)は、アメリカの心理学者エリック・バーン(Eric Berne)が創始した「交流分析」という人間関係の心理学理論に基づいて作られた性格診断テストである。その内容は「厳格的父親」のCP度、「養成的母親」のNP度、「成人」のA度、「自由的孩子」のFC度と「従順的孩子」のAC度を測定する50項目を含む。今回、修正された中学生版のエゴグラムを用い、子どもの内面的変化を探ってみる。

III 結果

1 子どもの「生きる力」の変化

プログラムAについては、「IKR評定」の事前と事後の回答を得点化し、一元配置分散分析を行い、t検定を加えた結果は図表3である。示したように、「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」3つのカテゴリにおいて、実践前より事後の平均点は増えており、統計的有意差が認められる。

プログラムBについて、「IKR評定」の事前と事後、一ヶ月後の平均値、多重比較の分析手法で得たt検定の結果は図表4である。示したように、「心理的社会的能力」は事前と事後の比較($P < 0.001$)はもちろん、体験活動から一ヶ月を経過しても、その平均値は事前より高く、統計的有意差($P < 0.01$)が認められる。3つのカテゴリを含めた「生きる力」の変化が統計的に認められ、一ヶ月後にもプログラムの有効性を維持できると言えるだろう。

2 クラスにもたらす変化

もし学校生活を「日常」的生活場面と考えれば、子どもにとって、プログラムのような活動は「非日常」的体験ともいえる。自然体験あるいは生活体験活動を経験した子どもたちはクラスの中でどのような変化を表しているだろうか。

図表5はA学級の子どもの実践前後の学級に対する評価である。みると、④「協力し合う雰囲気がある」、⑪「清掃の分担が果たしている」、⑬「行事をチームで取り込める」といった集団の凝集性にプラス変化がある。また、⑩「友達が分からないことを教えてくれる」、⑫「担任と気軽に話せる」、⑳「自分の悪い点を注意してくれる」のような教員と生徒あるいは生徒間の人間関係項目にもいい変化がみられる。さらに、プラス変化は⑯「学習に前向きに取り組める」、⑰「移動・着替えにテキパキ行動できる」、つまり学習意欲、行動様式においても効果的にみられる。一方、⑥「議長を中心に話し合える」、⑨「リーダーを支える雰囲気がある」にマイナス変動があるため、体験活動を通して子どもたちが相互理解を深めることで、学級組織の変化が学級経営に不安定をもたらしたのかもしれない。

B学級の子どもが学級に対する評価の変化は図表6のとおりである。示したように、体験活動の直後(事後)には、もともと得点の高い項目、たとえば②「明るく楽しい雰囲気がある」、⑦「挨拶ができています」は事前よりさらに高く評価している。事前では低かった項目、⑤「授業中に落ち着く雰囲気」、⑰「移動・着替えにテキパキ行動できる」などについて、10点以上のプラス評価をしているため、学校生活にメリハリがついたと考えられる。さらに学級の凝集力にも増強した傾向が読み取れる(項目④⑥⑯)。ただ、項目③の「教科委員や係り仕事」に対して、その評価は事前より低くなっているため、A学級と似たように、学級組織が機能しづらくなった可能性がある。一ヶ月後のデータを見ると、項目の半分ほど(9項目)は事後より減ったものの、事前と比べて高い数値を示しているため、体験活動の効果は一ヶ月立っても維持されると思われる。一方、事後に増加せず一ヶ月後さらに減少した項目、例えば⑪「清掃の分担が果たしている」、⑨「リーダーを支える雰囲気がある」から、やはり学級組織の機能について戸惑ってしまう様子が見えよう。

3 子どもの友人関係の変化

今回の調査対象は小規模校5年生の生徒である。単学級でクラス替えを体験していないため、クラス全体で大

図表3 生きる力の下位尺度の平均点変化とt検定の結果（A学級）

N = 16 df = 15

能力	調査項目	事前調査		事後調査		t値	有意確率 (両側)
		M	SD	M	SD		
生きる力		108.9	14.6	122.4	24.1	3.570	0.0028 **
心理的社会的能力		53.9	8.7	59.2	13.6		
非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.2	1.1	4.4	1.2	2.423	0.0285 *
	15. 小さな失敗をおそれない	4.4	1.0	4.4	1.4		
積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.1	0.9	4.3	1.0		
	25. 前向きに、物事を考えられる	3.8	1.2	4.5	1.1		
明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.0	1.2	4.3	1.5		
	19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	3.9	1.4	4.3	1.4		
交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.0	1.0	3.2	1.3		
	21. だれとでも仲よくできる	3.9	1.2	4.5	1.0		
現実肯定	9. 自分のことが大好きである	2.9	1.7	3.6	2.0		
	23. だれにでも、あいさつができる	4.8	1.2	5.1	0.9		
視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.6	1.0	3.9	1.2		
	17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.4	0.9	4.2	1.2		
適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.4	0.7	4.4	1.0		
	22. その場にふさわしい行動ができる	3.6	1.2	4.1	1.3		
徳育的能力		32.1	4.4	36.8	5.9		
自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.1	1.3	4.6	1.2	5.694	0.0000 ***
	28. お金やモノのむだ使いをしない	3.7	1.3	4.6	1.3		
自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる	4.4	1.0	4.4	1.1		
	20. 季節の変化を感じることができる	3.7	1.0	4.6	1.0		
まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.1	1.1	4.4	1.1		
	26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.3	1.1	4.9	1.0		
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.0	0.8	4.8	1.2		
	16. 人の心の痛みがわかる	3.9	1.2	4.4	1.1		
身体的能力		22.9	4.7	26.4	6.2		
日常的行動力	13. 早寝早起きである	3.1	1.7	4.2	1.6	2.863	0.0118 *
	27. からだを動かしても、疲れにくい	3.8	1.3	4.2	1.0		
身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.0	1.2	4.2	1.6		
	18. とても痛いケガをしても、がまんできる	3.4	1.5	4.2	1.6		
野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.7	1.1	5.0	1.2		
	24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.9	1.3	4.6	1.3		
* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001							

*各項目で「とてもあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点としてそれぞれ1点刻みで得点化し、項目ごとに平均点(M)及び標準偏差(SD)を算出

ファミリー的な仲よしグループをつくると思われる。しかし、図表7及び図表9が示したように、A、B学級とも、子ども達はいくつの遊び集団に分かれている。

A学級事前の遊び集団(図表7)としては、男子生徒5名は2つの遊びグループになっている。12番生徒は両方のグループに好まれ、中心人物である(スター)と考えられる。女の子はだいたい2名あるいは3名にかたまり、3人グループに中心になる子がいるが、わりと閉鎖的集団をつくっている。18番の生徒はクラス中の3人を

遊びメンバーと思っているが、同級生に選択されていない(周辺児)。

一週間の濃い内容の体験活動を通して、子どもの遊び集団はどう変化してきたかを事後のソシオメトリック・テストで測ろうとした(図表8)。その変化には以下の特徴が見られる。(1)キーパーソン(12番と15番生徒)で男女のグループのつながりができた、(2)2人組あるいははっきりとグループに属しなかった生徒はほかのグループとつながったため、新しい中心人物である1番、

体験活動が子どもに与える影響

図表 4 生きる力の下位尺度の平均点変化と t 検定の結果 (B 学級)

N = 20 df = 19

能力	調査項目	事前調査		事後調査		追跡調査		t値			有意確率 (両側)		
		M	SD	M	SD	M	SD	事後—事前	追跡—事後	追跡—事前	事後—事前	追跡—事後	追跡—事前
生きる力		120.9	16.9	132.4	18.4	130.4	15.0	4.388	1.085	3.192	0.001**	0.8767	0.01*
心理的社会的能力		59.0	9.6	66.8	10.0	65.3	8.7						
非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える	3.9	1.1	4.9	1.0	4.6	1.0						
	15. 小さな失敗をおそれない	4.1	1.2	4.9	1.0	4.5	1.1						
積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.1	1.0	4.6	0.8	4.4	1.0						
	25. 前向きに、物事を考えられる	4.3	1.2	4.8	0.9	4.4	1.1						
明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.8	1.0	5.1	1.4	4.9	1.2						
	19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	4.1	1.5	4.4	1.3	4.6	1.3						
交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.6	1.2	4.2	1.4	4.1	0.9	4.759	1.237	3.750	0.0005***	0.6960	0.0044**
	21. だれとでも仲よくできる	4.6	1.1	5.2	1.0	5.1	0.9						
現実肯定	9. 自分のことが大好きである	4.5	1.2	4.9	1.3	4.7	1.2						
	23. だれにでも、あいさつができる	5.1	0.9	5.4	0.8	5.5	0.6						
視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画を立てられる	3.8	0.8	4.5	0.9	4.4	1.0						
	17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.9	1.1	4.5	1.1	4.5	0.8						
適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.3	1.1	4.9	0.8	5.1	0.9						
	22. その場にふさわしい行動ができる	4.1	1.2	4.6	1.1	4.5	1.2						
徳育的能力		36.7	4.6	38.6	5.2	38.5	4.0						
自己規制	14. 自分かってな、わがままを言わない	4.5	1.0	4.9	0.8	4.6	1.3						
	28. お金やモノのむだ使いをしない	4.8	1.3	4.8	1.3	4.9	1.1						
自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる	4.6	1.1	4.7	1.5	4.7	1.0						
	20. 季節の変化を感じることができる	4.4	1.0	5.1	0.8	4.8	1.0						
まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.6	0.8	4.5	0.8	4.6	0.8						
	26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.6	0.9	5.0	1.0	5.0	0.7						
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	5.0	0.9	4.9	1.0	4.9	0.8						
	16. 人の心の痛みがわかる	4.2	1.0	4.7	0.9	4.9	0.8						
身体的能力		25.2	5.2	26.9	5.4	26.5	4.8						
日常的行動力	13. 早寝早起きである	4.0	1.6	4.4	1.6	4.2	1.4	2.423	0.616	1.962	0.0784	1.0000	0.1964
	27. からだを動かしても、疲れにくい	4.0	1.3	4.1	1.6	4.1	1.4						
身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.4	1.3	4.6	1.5	4.6	1.0						
	18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.3	1.1	4.8	1.0	4.4	1.4						
野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.7	1.4	4.9	1.3	5.0	1.4						
	24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.8	1.3	4.1	1.4	4.3	1.4						

* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

* 各項目で「とてもあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点としてそれぞれ1点刻みで得点化し、項目ごとに平均点 (M) 及び標準偏差 (SD) を算出

5番と13番生徒が登場した、(3)各なかよしグループの中心人物につながりができ、さらに「人気者」の仲よしグループが現れた、(4)18番生徒は選択せず選択されず、ひとりぼっちとなっている。

B学級の子どもの遊び集団は図表9のとおりである。男子グループ、女子グループとも、小集団にリーダーがあり、集団間につながるキーパーソンが存在し、やや良好な仲間関係を持っている。特に女子の場合、高学年に

なると、遊び集団が閉鎖的小集団になりがちであるが、B学級の女子はわりと開放的人間関係をつくっている。ただ、男子の19番生徒と女子の18番生徒は、数人に選択されるものの、自ら遊び相手を認めていなく、クラスの中で浮いているようである（周辺児）。

一週間の体験活動後、B学級の遊び集団に変化が現れた。図表10で示したように、(1)男子集団、女子集団とも、「一方的」あるいは「相互」の選択肢は事前より増えており、新たなスターたちが現れた。(2)「周辺児」であった19番生徒と18番生徒は、自ら遊び相手を選択しはじめ、さらに2つ以上の「相互選択」のような友人関係を持っているため、事前より人間関係が改善できたと考えられる。しかし一方、女子の17番生徒は何らかの原因で自ら遊び相手を選択しなくなり、体験活動の中で人間関係に

困惑を感じ取っているかもしれない。

一ヶ月後のB学級のソシオメトリック・テスト結果は図表11である。(1)体験活動直後より仲間集団の相互選択は減っているが、事前と比べるとかなりの改善が見られ、体験活動の効果は一ヶ月後にも維持されている。(2)女子グループは、スターと思われるキーパーソンは活動後さらに増えて、開放的仲よし集団として見る事ができる。(3)女子の18番生徒は引きつづき、仲間関係を維持できている。女子の17番生徒は直後の困惑状態から回復し、3つの相互選択関係を持っている。しかし、男子の19番生徒はまた仲間を選択しなくなり、「周辺児」の状態に戻っていた。

4 個々の変化をウォーキングする

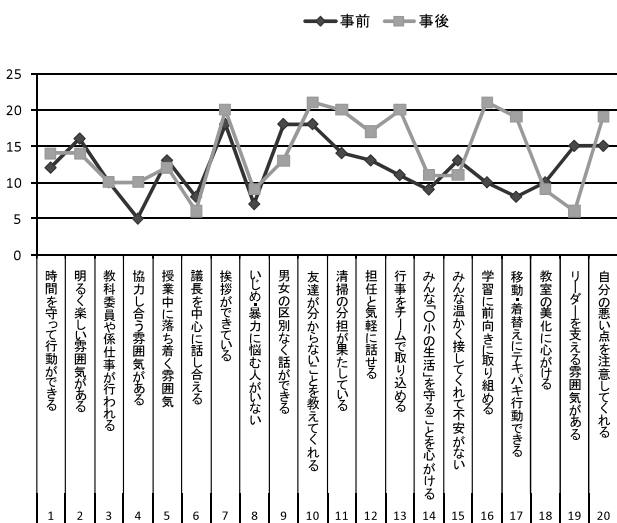
体験活動に対する評価にポジティブな表現が多い。他方、このような学校行事の後、クラスの秩序あるいは子どもの人間関係に乱れが生じやすくなるのも教師の実感である。したがって、子どもの変化をキャッチできれば、具体的手立てをすることも可能になる。

拙稿(2010)は学級調査とエゴグラム、ソシオメトリック・テストの結果を合わせて、A学級の18番生徒が活動前後におけるクラス、自分自身に対する認識の変化を分析した。本稿では、紙幅の関係でA学級についての分析を割愛し、主にB学級の子どもを対象にしてケーススタディを行う。

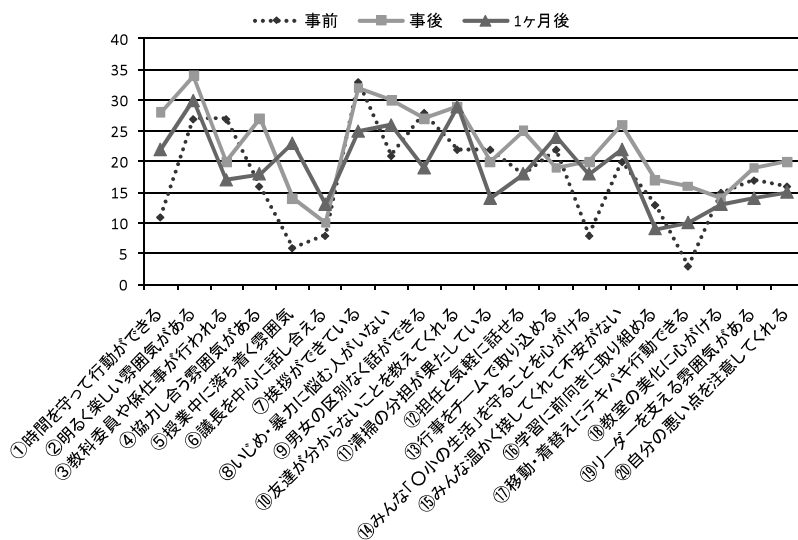
〈ケース1 17番生徒〉

図表9と図表10から、17番生徒が体験活動後に、友達に選ばれるものの、自ら友達を選択しなくなったことがわかった。同様、学級調査の得点の変化(図表12)を見ると、17番生徒が事後に学級への見方が事前より低下したこともうかがえる。エゴグラムからは17番生徒のマイナス変化が見られなかった(省略)。

17番生徒の学級調査の各項目得点の変化(図表13)を見ると、直後の時点で得点が事前より2点程度下がった項目が4つある。彼女は学級組織の変化(項目⑪、⑬)

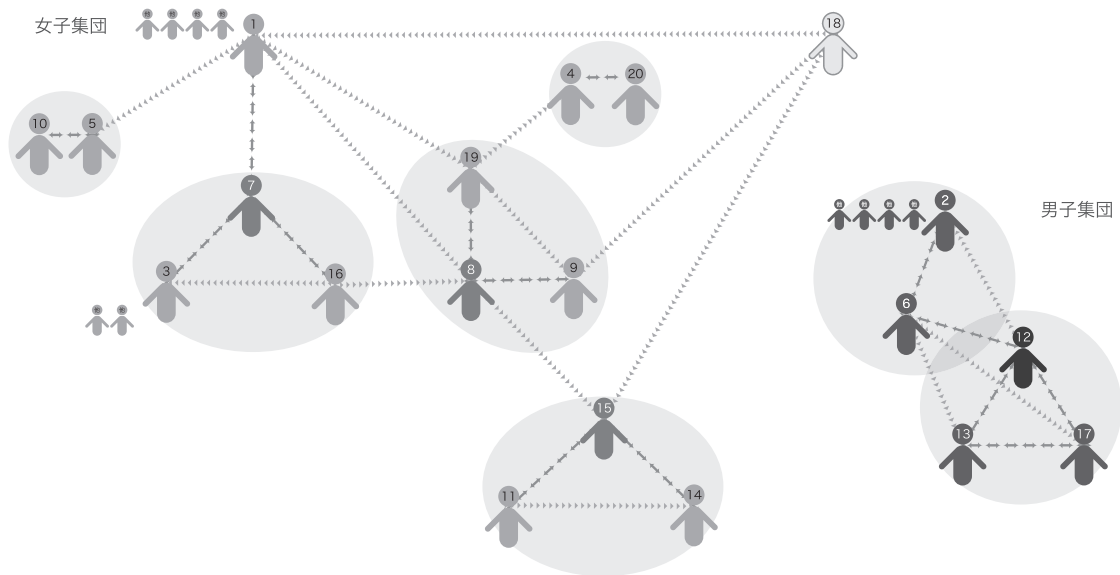


図表5 「学級調査」の変化(A学級)
 *各項目で「良くできている」を2点、「ほとんどできていない」を-2点として得点化した
 *横軸は学級調査の20項目、縦軸は各項目に対する全員の得点の合計

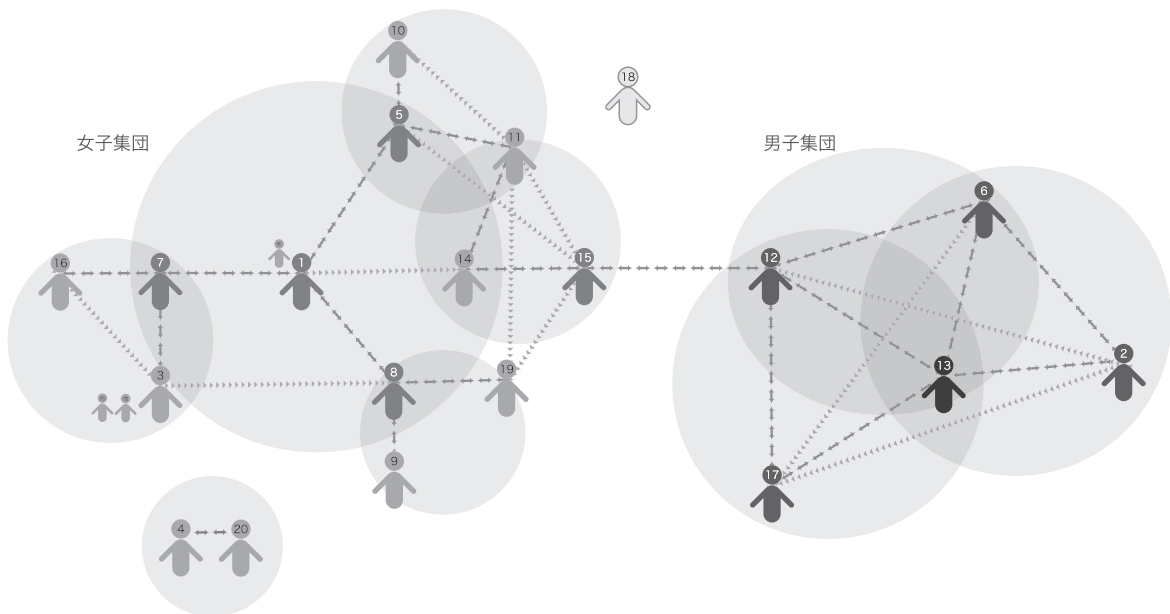


図表6 「学級調査」の変化(B学級)
 *各項目で「良くできている」を2点、「ほとんどできていない」を-2点として得点化した
 *横軸は学級調査の20項目、縦軸は各項目に対する全員の得点の合計

体験活動が子どもに与える影響



図表 7

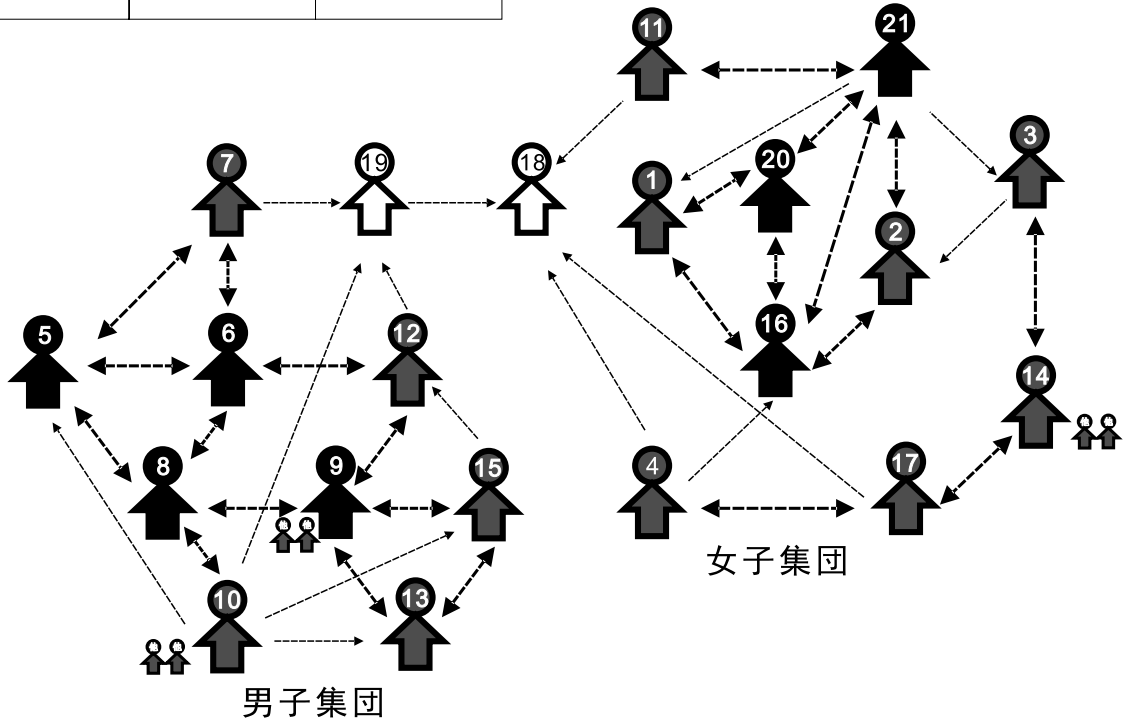


図表 8







適応しておらず、学習面につまずきがあり（項目⑰）、そしてクラスメイトとの人間関係を心配していた（項目⑮）ようだと読み取られる。

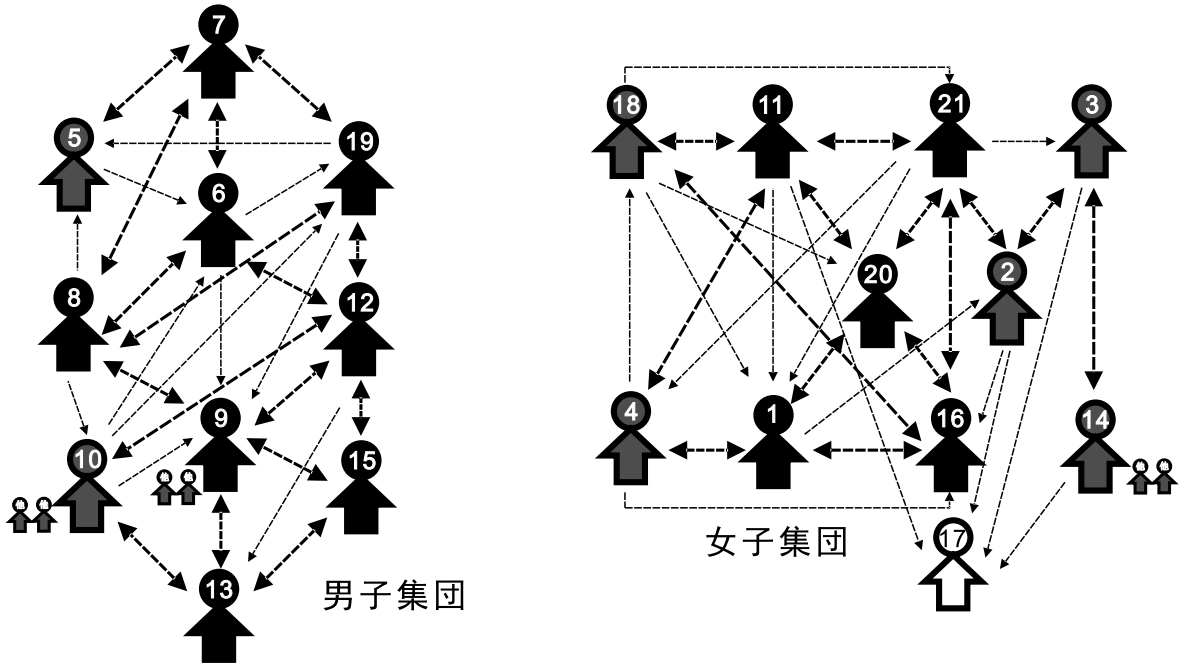
幸い、一ヶ月後の学級調査とソシオメトリック・テストからは、彼女の回復が何とか見られた。

 リーダー	 相互選択のない子	 選択
 相互選択のある子	 クラス外の子	 相互選択



図表9

 リーダー	 相互選択のない子	 選択
 相互選択のある子	 クラス外の子	 相互選択





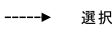



図表10

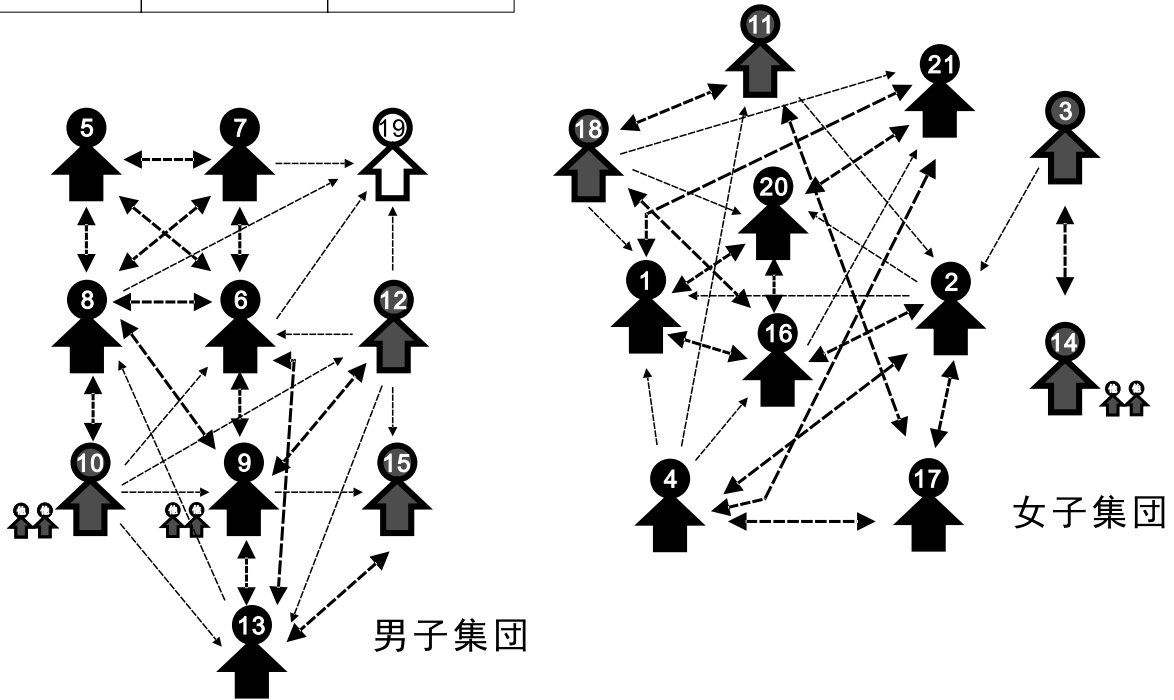
〈ケース2 15番生徒〉

ソシオメトリック・テスト (図表9, 10, 11) から、15番生徒がクラスの中で中心人物でもなく、どちらと言

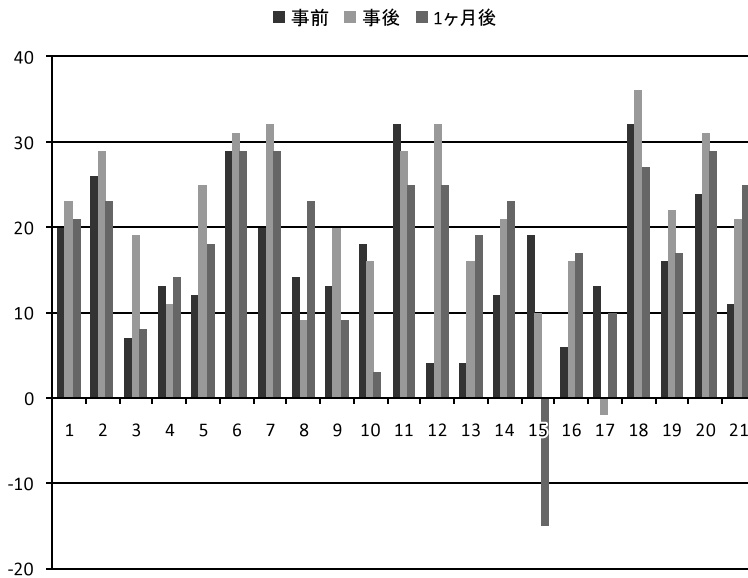
うとあまり目立たない存在だと判断される。しかし、学級調査の得点変化 (図表12) から、活動後及び一ヶ月後に彼の学級についての評価がいっそう低くなることがわ

体験活動が子どもに与える影響

 リーダー	 相互選択のない子	 選択
 相互選択のある子	 クラス外の子	 相互選択



図表11



*各項目で「良くできている」を2点, 「ほとんどできていない」を-2点として得点化した

*横軸は子どもの番号で, 縦軸は学級調査20項目得点の合計

図表12 子どもの「学級調査」得点の変化 (B学級)

かる。

図表14は彼のエゴグラムの変化である。示したように、彼は元々CP度が高くなく、A度とAC度は特に低いので、客観に物事を判断せず、無邪気な子どもだと思われる。活動後の数値から、彼のFC度とNP度が下がり、一応カテゴリーがバランス取れた状態になる。A度とAC度は事前より上昇し、少し自分を抑えることができた。一ヶ月後になると、彼のエゴグラムから大きな変化が見られ

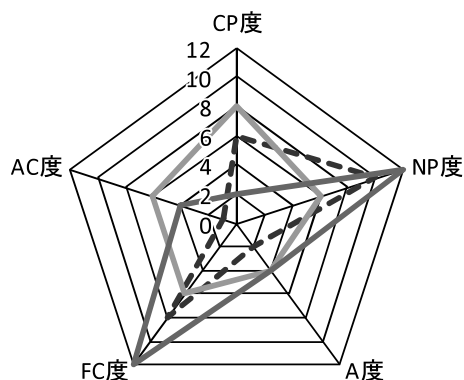
た。直後に下がったFC度とNP度は事前より上昇し、CP度が減少し、AC度も直後より低くなっているため、まわりに優しく付き合っている一方、わがままの行動に走る面も見えてきただろう。

一方、15番生徒の学級調査の各項目の変化(図表15)を見ると、体験活動の直後において、彼は担任に気軽に話せなくなり(項目⑫)、学級のチーム力(項目⑬)と男女生徒の関係(項目⑨)に悩んでいる。一ヶ月後にな

図表13 B学級17番生徒の「学級調査」得点の変化

	事 前	事 後	1 ヶ月後
①時間を守って行動ができる	0	1	1
②明るく楽しい雰囲気がある	2	2	1
③教科委員や係仕事が行われる	1	0	1
④協力し合う雰囲気がある	0	-1	0
⑤授業中に落ち着く雰囲気	0	-1	0
⑥議長を中心に話し合える	-1	-2	0
⑦挨拶ができています	0	1	1
⑧いじめ・暴力に悩む人がいない	1	0	0
⑨男女の区別なく話ができる	0	0	1
⑩友達分からないことを教えてくれる	0	0	0
⑪清掃の分担が果たしている	2	0	1
⑫担任と気軽に話せる	1	0	0
⑬行事をチームで取り込める	1	-1	1
⑭みんな「〇小の生活」を守ることを心がける	-1	-2	0
⑮みんな温かく接してくれて不安がない	2	0	0
⑯学習に前向きに取り組める	2	0	1
⑰移動・着替えにテキパキ行動できる	2	1	0
⑱教室の美化に心がける	0	0	1
⑲リーダーを支える雰囲気がある	1	0	1
⑳自分の悪い点を注意してくれる	0	0	0

--- 事前 — 事後 — 1ヵ月後



図表14 B学級15番生徒のエゴグラムの変化

ると、担任との関係が少し回復したが、クラスの役割分担（項目③、⑪、⑬）、クラスのリーダーシップ（項目⑲）に不満がある。クラスメイトとの人間関係（項目⑳）に不信を感じており、項目⑧では事前及び事後の2点から一ヶ月後のマイナス2点までに低下したため、本人自身「いじめられているのではないかと悩んでいる様子」がうかがえる。

むすび

1 自然体験モデルプログラムの有効性

本稿ではモデルプログラムの具体的実施過程を省略し、体験活動の内容及びプログラムの特徴のみを紹介したが、本研究で行う諸評価によって、2つのプログラムのような体験活動の有効性が十分に検証できたと考えられる。1週間の時間をかけて、自然体験、生活体験と集団宿泊体験を通じて、子どもは大きな成長を遂げることができた。まず、「心理的社会能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」を含める「生きる力」の増強では統計的有意が認められ、プログラムが「生きる力」の育成に良い影響を及ぼすと確認できた。次に、学級調査によって、その場での体験にとどまらず学級のあり方にも良い影響を与えることが認められた。子どもが「非日常」から「日常」に戻っても、「チームとして学級」という凝集性が高まり、生徒間あるいは教員と生徒の間に「一緒に過ごし、一緒に頑張った」という連帯感が増した。さらに、体験活動は生徒の「裏文化」としての仲間集団にも影響を与えていた。一緒に困難を乗り越える経験は、普段の仲よしグループ間のつながりをもたらし、分散そして閉鎖的小集団から変化していくと予想される。

2 活動後配慮すべきこと

いずれのデータからも、子どもの変化を客観的にみる

図表15 B学級15番生徒の「学級調査」得点の変化

	事 前	事 後	1 ヶ月後
①時間を守って行動ができる	2	2	1
②明るく楽しい雰囲気がある	0	1	0
③教科委員や係仕事が行われる	2	2	-1
④協力し合う雰囲気がある	-1	0	-2
⑤授業中に落ち着く雰囲気	0	0	0
⑥議長を中心に話し合える	1	0	-2
⑦挨拶ができています	0	0	-1
⑧いじめ・暴力に悩む人がいない	2	2	-2
⑨男女の区別なく話ができる	2	0	0
⑩友達が分からないことを教えてくれる	2	2	-1
⑪清掃の分担が果たしている	0	0	-2
⑫担任と気軽に話せる	0	-2	0
⑬行事をチームで取り込める	0	-2	-2
⑭みんな「〇小の生活」を守ることを心がける	-2	-1	-1
⑮みんな温かく接してくれて不安がない	2	0	1
⑯学習に前向きに取り組める		2	2
⑰移動・着替えにテキパキ行動できる	-1	2	-1
⑱教室の美化に心がける	2	1	0
⑲リーダーを支える雰囲気がある	0	0	-2
⑳自分の悪い点を注意してくれる	2	1	-2

ことができた。体験活動によって、集団の凝集力・人間関係、そして学習意欲・行動様式に改善がみられる一方、もとの学級組織が機能しにくくなり、学級経営に手を打つ必要が生じる。さらに、4つの調査結果を総合的に分析すれば、A学級の18番生徒とB学級の15番生徒の不適応、B学級の17番生徒の仲間はずれなど、子どもの変化及びその原因がある程度で判断できる。したがって、活動後学級にどのような変化があり、子どもにどのような変化をもたらしたか、子どもの仲間集団にどう影響を与えたのかを見ることで、教師がどのように配慮すべきかの1つの手掛かりになるだろう。

3 体験活動による評価のあり方

学力と違い、体験活動を評価することは難しい。本稿は2つの学級を研究対象とし、体験活動を通して、子どもの「生きる力」という総合的能力、学級のあり方、遊び集団（仲間集団）と子どもの性格の変化を量的に捉えるケーススタディである。結果は以上のように、体験活動の効果と問題点はある程度に見えてきた。しかし一方で、子どもたちはなぜこのように変化してきたのか、どのようなきっかけをつくれればよりよい変化ができるのかについて、さらに質的調査あるいはアクションリサーチによって解明する必要があるだろう。今後の課題にもなるが、このような研究を蓄積し、体験活動に対する評価のあり方を構築していきたい。

謝 辞

まず、子どもに関する個人情報の関係で学校名及び個人の名前を挙げられないが、九州某国立青少年の家、2つの小学校の子ども及び学校関係者に、調査研究という貴重な機会をいただくことで、改めてお礼を申し上げたい。最後に、10年間育てていただいた指導教官である明石要一先生、公私ともたいへんお世話になった千葉大学教育学部の先生方に、この場を借りて深甚の感謝を申し上げます。

参考文献

- 明石要一（2002）『学級の集団的機能を見直す』 明治図書
- 小林道正・杉本克之・佐伯英人（2010）「小学生の集団宿泊活動の教育効果—小学校自然体験活動のモデルプログラムについて」（報告）『『青少年教育フォーラム』第10号 P109～117
- 齊藤雄・松井和彦（2010）「小学校と連携した長期自然体験活動の実践報告」（報告）『『青少年教育フォーラム』第10号 P95～107
- 坂本昇一ら（1988）『『青少年の野外教育活動に関する研究—「少年自然の家」における活動による実証的考察』（報告書）財団法人 伊藤忠記念財団

時代・明石要一（2010）「体験活動の効果及び評価のあり方に関する一考察—子どもの体験活動事例を追って」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻 P167～173
住田正樹（1995）『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会
杉山峰康（1985）『交流分析（講座サイコセラピー8）』日本文化科学社

注

- 1 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2010）「事業評価に使える〈生きる力〉の測定・分析ツール」
- 2 教育現場の実践者。専門分野は生徒指導，学校支援ボランティアなど幅広い。教諭，教育委員会学びセンター所長など歴任。